

松浦位用媛石魂録  
六行集卷之四

13  
3240  
1





曲亭主人著

松浦佐用媛石

寛録

溪齋英泉画 文溪堂

昭和十年七月九日購

伊本

宮崎



天平二年七月五日... 謹上

大伴佐提比古郎乎特被朝命奉使... 彼會難即登高山之嶺... 斷肝黯然銷魂... 得保都必等麻... 胡非爾比例布利之用... 麻能奈



領中 磨山考

領中 磨嶽ハ肥前國三根郡。濱崎の南にあり。むじ大伴挾提彦が妻

松浦佐用媛の山に登り。領中江脱てその夫の高麗に使者を遣はし

所なりといふ。佐用媛の支。國史経籍小に云ふと云ふも。ゆくりといひ

傳たるや。萬葉集卷五下。山上憶良が松浦の歌三首。領中磨の嶺と

詠む歌一首。後人追和の歌四首。三嶋王追和の歌一首。之を九首佐用

媛の支と詠む。あれれ。歌ハ巷談街説と云て。詠出る古。白ありれば。國

史不合ざるあり。後生推量の説と云ていふも。當初漢土。望夫石以

るひじて。領中磨山の名と設たる後。又和漢同日の談攷。といひれすに

彼望夫石といふもの。貞婦との夫の役を行小悪死して。化して。一

おのり。江山の自然石。人の立望がごとく。の孤存て。望夫と令。定詩文

者流のつぎられ。程伊川の説。引て。鎌倉志小に。望夫石と名つるもの。忠州小望夫

夫石の支。明録不出づ。又石なり。望夫と名つるもの。忠州小望夫

棹又望夫臺あり。大明一統志小に。又述異記小載する。想思草。

五雜俎小に。石雄風。望夫石の故事の如し。亦是小説者流の

寓言の。怪む不足ら。我邦。西国の海濱に。望夫石と稱するもの

間とあり。又鎌倉龜谷の石切山小望夫石あり。志小云。富山六郎重保

由比が濱に。戦死す。その婦の山に登り。望見て。悲死す。終に化して石と

なり。といひ傳ふ。枯骨の化石に。和漢の貞婦。化して

石と云ふ。その全骸を遺す事。いふに。領中磨山の支。推して

推して。馬琴嘗按ぶ。日本紀欽明紀小に。又云。調書。大葉子が歌

儼が妻。大葉子が歌。憶良が詠。疑らく。後人竊に大葉子が歌

大和言集卷之二



成るるて更領中壘山の名と設け我々不教行と抄書と遺忘備る古史六抄れ  
博士おきて強て臆説と多きほめぬとある人領中壘山の夏と向してくハ替つ。  
羞らる識者の物り人なる也。日本紀欽明天皇の紀云。

天皇二十三年遣大將軍紀男麻呂副將河邊  
臣瓊垂令討新羅而其軍不利時為新羅所虜。  
調吉士伊企難為人勇烈終不降服新羅鬪將  
拔刀欲斬逼而脱禪追令以尻鬻向日本大  
叱曰日本將鬻我臆雖即號曰新羅王暗我  
覽雖被苦逼尚如前由是見殺其子亦  
子抱其父而死伊企難辭吉難棄皆如此由  
特諸將帥所痛其妻大葉子亦竝見禽愴然而

歌曰

柯羅俱爾能基能倍爾陀致底於譜磨故  
幡比禮甫囉須彌母耶摩等陞武岐底

或有和曰

柯羅俱爾能基能倍爾陀志於譜磨故  
幡比禮甫囉須彌母耶摩等陞武岐底

八月天皇遣大伴連狹手彦乃領二兵數萬代于高麗  
狹手彦乃用百濟計打破高麗要以上摘

こを瓜もて切らふ。この年天皇。うらび狹手彦と大將軍と。高麗と討  
しゆひた水に。伊企難が妻大葉子が敵の城に登りて比礼甫囉須彌と  
歌ひて。その夫に追悼せしと惧傳へ。狹手彦が妻。佐用媛とて。又



人の異<sup>こと</sup>しして事<sup>こと</sup>の似<sup>た</sup>たふや。いと不<sup>ふ</sup>審<sup>しん</sup>とて言<sup>こと</sup>の序<sup>つら</sup>り。前<sup>まへ</sup>に記<sup>し</sup>き大<sup>おほ</sup>葉<sup>は</sup>

子<sup>こ</sup>の歌<sup>うた</sup>。柯<sup>か</sup>羅<sup>ら</sup>俱<sup>く</sup>尔<sup>る</sup>能<sup>の</sup>基<sup>き</sup>能<sup>の</sup>倍<sup>へ</sup>依<sup>え</sup>陀<sup>た</sup>致<sup>ち</sup>底<sup>て</sup>。韓<sup>かん</sup>国<sup>こく</sup>の城<sup>きやう</sup>上<sup>じやう</sup>子<sup>し</sup>立<sup>た</sup>てあり。比<sup>ひ</sup>例<sup>れい</sup>

甫<sup>ふ</sup>囉<sup>ら</sup>須<sup>す</sup>弥<sup>み</sup>母<sup>ぼ</sup>耶<sup>や</sup>魔<sup>ま</sup>等<sup>と</sup>陛<sup>へい</sup>武<sup>ぶ</sup>岐<sup>き</sup>底<sup>て</sup>ハ領<sup>りやう</sup>中<sup>ちゆう</sup>毫<sup>ご</sup>隅<sup>ご</sup>也<sup>なり</sup>。月<sup>つき</sup>本<sup>ほん</sup>方<sup>ほう</sup>向<sup>きやう</sup>てなり。又<sup>また</sup>一<sup>いつ</sup>

歌<sup>うた</sup>の基<sup>き</sup>能<sup>の</sup>陛<sup>へい</sup>依<sup>え</sup>陀<sup>た</sup>志<sup>し</sup>ハ城<sup>きやう</sup>の上<sup>じやう</sup>ハ比<sup>ひ</sup>禮<sup>れ</sup>甫<sup>ふ</sup>囉<sup>ら</sup>須<sup>す</sup>弥<sup>み</sup>那<sup>な</sup>你<sup>に</sup>波<sup>は</sup>陛<sup>へい</sup>武<sup>ぶ</sup>

岐<sup>き</sup>底<sup>て</sup>ハ領<sup>りやう</sup>中<sup>ちゆう</sup>毫<sup>ご</sup>隅<sup>ご</sup>を。浪<sup>なみ</sup>速<sup>すみ</sup>方<sup>ほう</sup>向<sup>きやう</sup>てなり。領<sup>りやう</sup>中<sup>ちゆう</sup>毫<sup>ご</sup>隅<sup>ご</sup>とハ領<sup>りやう</sup>中<sup>ちゆう</sup>毫<sup>ご</sup>隅<sup>ご</sup>を

なり。今<sup>いま</sup>俗<sup>ぞく</sup>のひれなり。注<sup>しゆ</sup>とてハ詛<sup>そ</sup>とを。因<sup>よ</sup>りハ今<sup>いま</sup>の使<sup>し</sup>者<sup>しや</sup>人<sup>ひと</sup>を罵<sup>ののし</sup>りたり

たり。今<sup>いま</sup>俗<sup>ぞく</sup>のひれなり。注<sup>しゆ</sup>とてハ詛<sup>そ</sup>とを。因<sup>よ</sup>りハ今<sup>いま</sup>の使<sup>し</sup>者<sup>しや</sup>人<sup>ひと</sup>を罵<sup>ののし</sup>りたり

たり。今<sup>いま</sup>俗<sup>ぞく</sup>のひれなり。注<sup>しゆ</sup>とてハ詛<sup>そ</sup>とを。因<sup>よ</sup>りハ今<sup>いま</sup>の使<sup>し</sup>者<sup>しや</sup>人<sup>ひと</sup>を罵<sup>ののし</sup>りたり

伊<sup>い</sup>企<sup>き</sup>儼<sup>げん</sup>が新<sup>しん</sup>羅<sup>ら</sup>王<sup>わう</sup>暗<sup>あん</sup>我<sup>が</sup>臆<sup>おく</sup>腫<sup>しゆ</sup>といふ不<sup>ふ</sup>起<sup>き</sup>る歌<sup>うた</sup>。六<sup>ろく</sup>是<sup>ぜ</sup>古<sup>こ</sup>言<sup>げん</sup>の餘<sup>あま</sup>波<sup>は</sup>なり。契<sup>けい</sup>は

且<sup>かつ</sup>萬<sup>まん</sup>葉<sup>はつ</sup>集<sup>じふ</sup>憶<sup>おく</sup>良<sup>りやう</sup>が歌<sup>うた</sup>ハ前<sup>まへ</sup>に不<sup>ふ</sup>出<sup>で</sup>り。あの人<sup>ひと</sup>松<sup>しょう</sup>浦<sup>ぼ</sup>を詠<sup>よ</sup>る歌<sup>うた</sup>也<sup>なり</sup>。

麻<sup>あ</sup>都<sup>と</sup>良<sup>りやう</sup>我<sup>が</sup>多<sup>た</sup>佐<sup>さ</sup>欲<sup>よく</sup>比<sup>ひ</sup>賣<sup>ま</sup>能<sup>の</sup>故<sup>こ</sup>何<sup>なに</sup>比<sup>ひ</sup>列<sup>れつ</sup>布<sup>ぷ</sup>利<sup>り</sup>斯<sup>し</sup>夜<sup>や</sup>麻<sup>ま</sup>

能<sup>の</sup>名<sup>な</sup>乃<sup>の</sup>美<sup>み</sup>夜<sup>や</sup>伎<sup>ぎ</sup>伎<sup>ぎ</sup>都<sup>と</sup>都<sup>と</sup>遠<sup>とん</sup>良<sup>りやう</sup>武<sup>ぶ</sup>

憶<sup>おく</sup>良<sup>りやう</sup>ハ筑<sup>ちゆう</sup>前<sup>ぜん</sup>の國<sup>こく</sup>司<sup>し</sup>也<sup>なり</sup>。天<sup>てん</sup>平<sup>へい</sup>年<sup>ねん</sup>中<sup>ちゆう</sup>彼<sup>か</sup>处<sup>こ</sup>不<sup>ふ</sup>在<sup>ざい</sup>任<sup>にん</sup>トノタリハ土<sup>ど</sup>俗<sup>ぞく</sup>

の以<sup>も</sup>伝<sup>でん</sup>りともを以<sup>も</sup>て。以<sup>も</sup>て詠<sup>よ</sup>るを。佐<sup>さ</sup>用<sup>よう</sup>媛<sup>をん</sup>が事<sup>こと</sup>ハ今<sup>いま</sup>也<sup>なり</sup>。印<sup>いん</sup>婦<sup>ぶ</sup>の

龜<sup>き</sup>鑑<sup>かん</sup>として。これ城<sup>きやう</sup>稱<sup>しやう</sup>噴<sup>ふん</sup>を。六<sup>ろく</sup>大<sup>だい</sup>葉<sup>はつ</sup>子<sup>し</sup>が夏<sup>か</sup>不<sup>ふ</sup>至<sup>し</sup>る。あづかるとの多<sup>た</sup>なり。

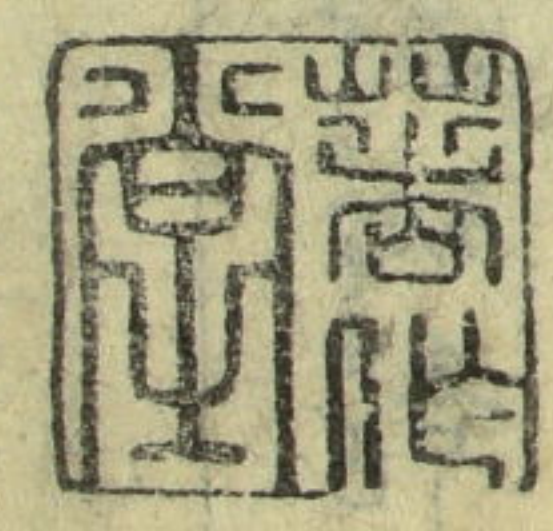
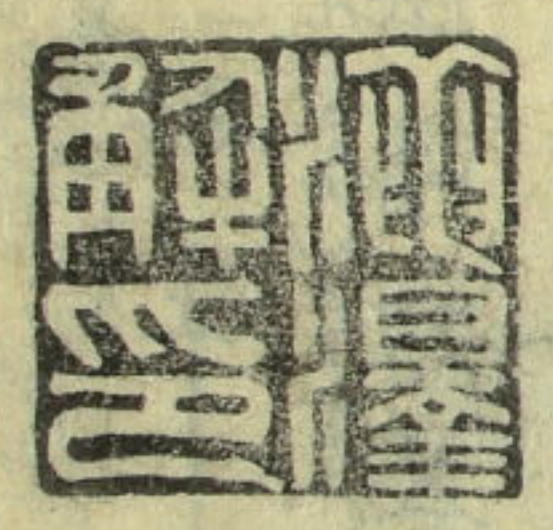
伊<sup>い</sup>企<sup>き</sup>儼<sup>げん</sup>夫<sup>ふ</sup>妻<sup>さい</sup>の幸<sup>さいはつ</sup>なり。あづかるとの多<sup>た</sup>なり。

言

文化四年夏五月下浣書于魚俎橋畔之

箒笠軒

曲亭主人馬琴撰



大中言集卷之八



# 石魏錄前編目錄

第一

祈鏡神社孖生

第二

陰陽贈答名初香

第三

不識恥大得取

第四

詠詩歌一處女舌戰

第五

狷才讒奸被罪

第六

含淚節婦送義男

第七

海濱失書得書

第八

錦繡和歌召邊將

第九

龍神洞孤客知命

第十

末龍華親族全聚

離別從來易淚流

松浦佐用媛

那堪愁上更添愁

共拚愁到無添處

目斷腸枯淚也收

海邊の伸ゆ松と

久ねとらむとぬり

松浦さよ



大和言集卷之十一



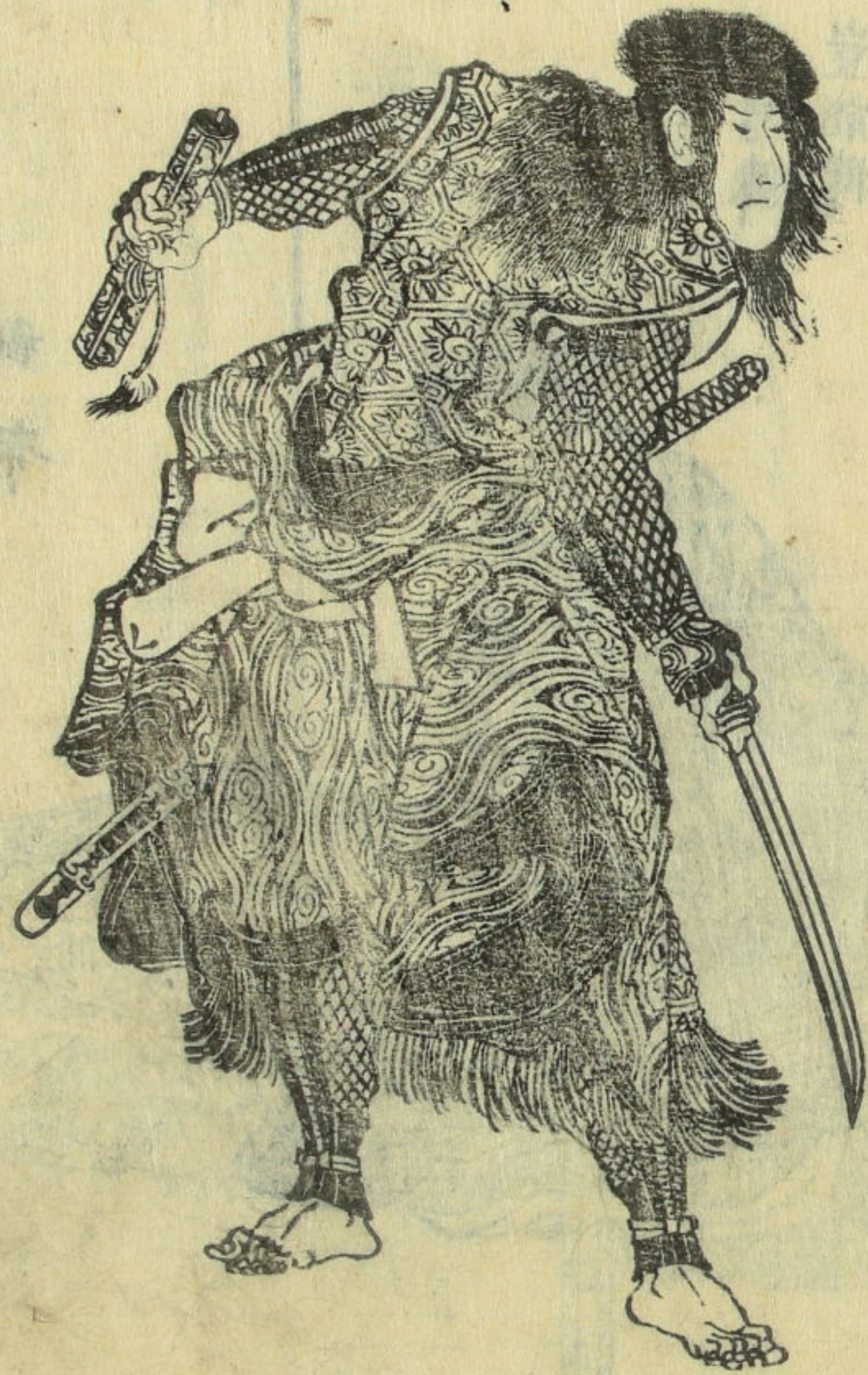
盡道神儒不易逢  
 誰知陸地遇喬松  
 降魔不用沙門杵  
 別有奇方制毒龍

瀬川采女古次



只道饑家起  
 禍因  
 誰知家鬼弄  
 家人  
 本他刺客情  
 難測  
 未必豫讓善  
 保身

牛淵九郎清繩



大和言...



只畫蛾眉便可憐  
淫鴉識字豈能傳  
須知寸女凌雲氣  
吐出蓬萊五色蓮

瀬川セガハ米女メメ妻メ  
秋布アキフ



擬笑反成  
哭求榮而  
得辱難容  
五尺身誰  
慙斯惡木

鼠ネズミ川カハ嘉カ二ニ郎ロウ



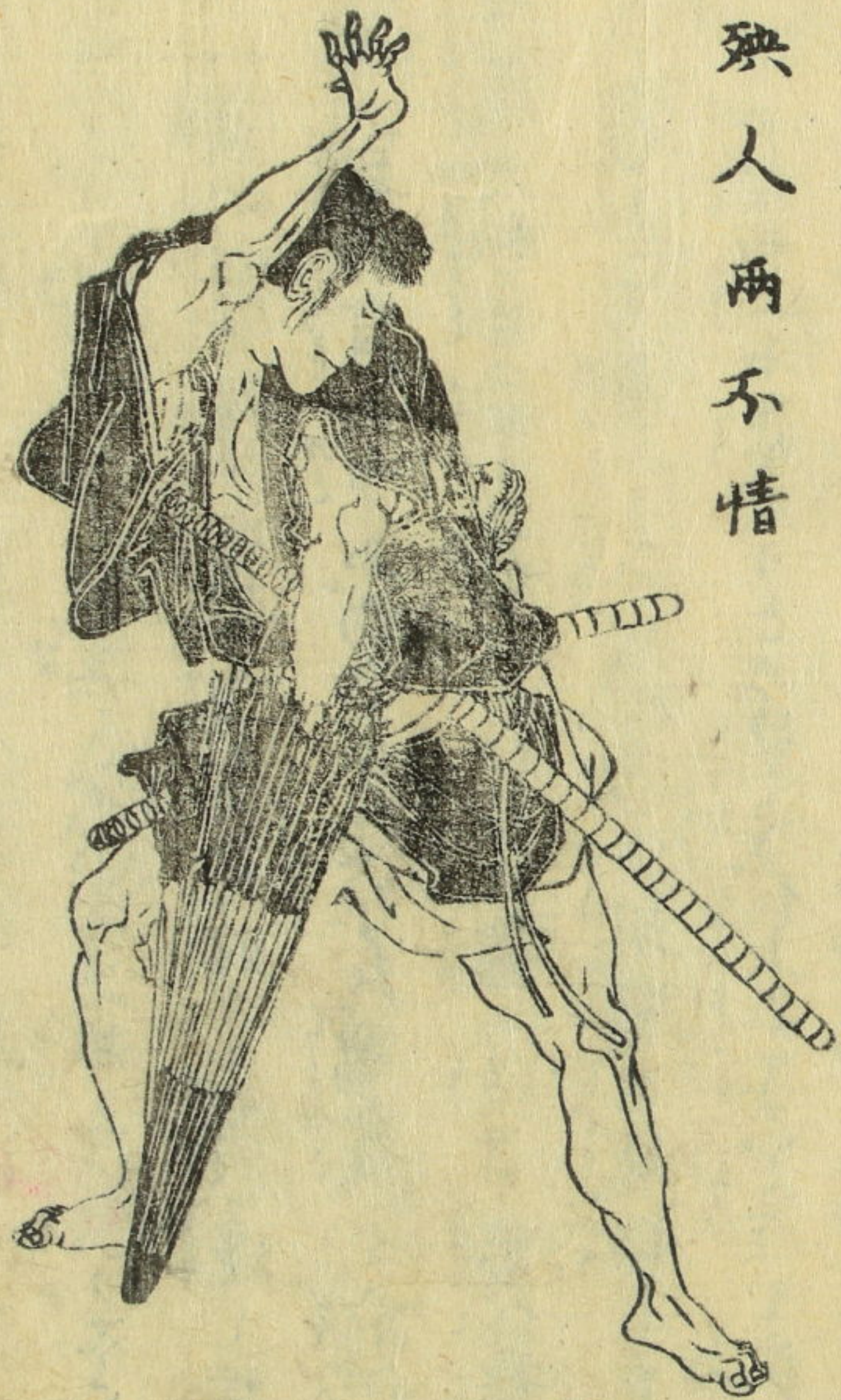


竹 終 生  
便 直  
梅 到 死  
猶 香

五嶋たけのしま



從 來 實 福 起 虛 名  
累 已 歿 人 兩 不 惜



長城野兵太ながののひやうだい

大正十三年...



こゝに著して草紙物語と浮萍の根はこと成種にして水莖のおほつゝ  
形をいふく人の澄濁とされり又説き及樂一悲成懲らんとよみかた  
かみとしてとればわづらひらふ詩歌もも伊勢物語の例ふらむひく  
或は古に及今めかしくけりしわれは近きといふ曲ふいひうえされおほ  
かり時とわれ夏の夜の短たおのがをせめてぬく思ひ遠く描れりは  
よろせだのふに易に窓の下ふわうとほかた端書して前編之冊の  
草紙とは唐蓬大和言葉と名づつれり霜小後菊の操と我男  
節婦小比ていふ又その書の一名は松浦佐用媛石魂録といふ故  
いふふとわれ領中登毛山ふ立女及びとめ望夫石上ふ子と産を費端と  
あられの瀬川米女への後の挟み彦母して博多秋布の後の佐用媛とも  
えはしむひね文化丁卯仲夏提月曲亭主人再識 四言

松浦佐用媛石魂録前上卷

東都

曲亭馬琴編次

第一

鏡神宮ふ初と孫代生い

肥前國上古の葦北火國と号は蓋天草の海中に火のり常あ波上ふ  
燃れといくばくといふ火とこれ火不知火と稱ふ和名鈔も肥前を比乃  
三知乃文知と訓も又肥後比乃美知乃之利と訓も肥といひ比といふ  
火の謂ありその國海不知火あり山小礪黃火多し故其火の國也  
とぶく十一郡その中み松浦郡は彼杵郡の西ふりて海辺ふ處は日本  
紀事神功皇后の九年四月火前國松浦縣ふ皇御ゆりて  
祈て宜く朕西のかご賊國をよとめんと欲と色し成てめは  
釣をのむごとてやがて竿及び多ふ細鱗魚をひり白皇后



あんで希見物ありと宣ふ。これふよりて時の人その処をばけんといふと  
編み今松浦といふに訛なりと見えたり。はれば万葉集第五ふ。

松浦川の瀬むり年魚釣るとなせは妹の裳めと云

とよめれいとの故りみひよせたりあり。又當國三根郡小領中壁山あり。

松浦も鏡神社のりみな佐用媛が事迹なりといひ伝ふ或は鏡の宮へ神功

皇后松浦山に登りてまづのり御鏡を安置し多れは神体といひしむ。

且も源氏物語新古今集お小鏡の宮とよめれをいれは佐用媛が事

迹とすはくとおし。源氏なまろく一君ふしむをいれはありあるかこの宮をのりといひ

これらのものふはとて奇き物語のり今説先と云聽人皇八十九代の天子。

龜山院の御時肥前國松浦郡南野の御ふ瀬川健三道孝といひ武士

の浪人のりり。その公は正して篤實敦行世も稀なり。妻の名は木綿妙

とよめ。肥後國葦北郡水原の海邊に濱村の御士何れいひ女児の

父母世にやしくし。親族もなかりしくつて夫も負ひ師を盡して半島も

嗣とれり。抑瀬川健とて祖父道次は往時壽永のころ源平の合

戦も毎度先登りて大軍功ありしかば頼朝卿と云のら相模國ふ于

て一知懸命の地を二行世し。二世將軍頼家の時ふ此の過ありと忍地

肥前國の松浦縣に配流されかくて後道次が子道村が村ふ松浦もて僅

なる田園を買りとめ。今の健と云傳はり。さればその家富みの縁と云

食ふ乏しからば夫の武藝文学と云行し。妻は又和歌も嗜てい。安らふ

世にわたりぬ。かくて健は年四十ふあられも。子といはりのまじり。夫婦

父とこれに歎くといふも。この人かのみかづればあねが。いふもさくたし。

ここのれ日妻の木綿妙。夫ふよりける。吾們過世ありて。子と筆とて子孫

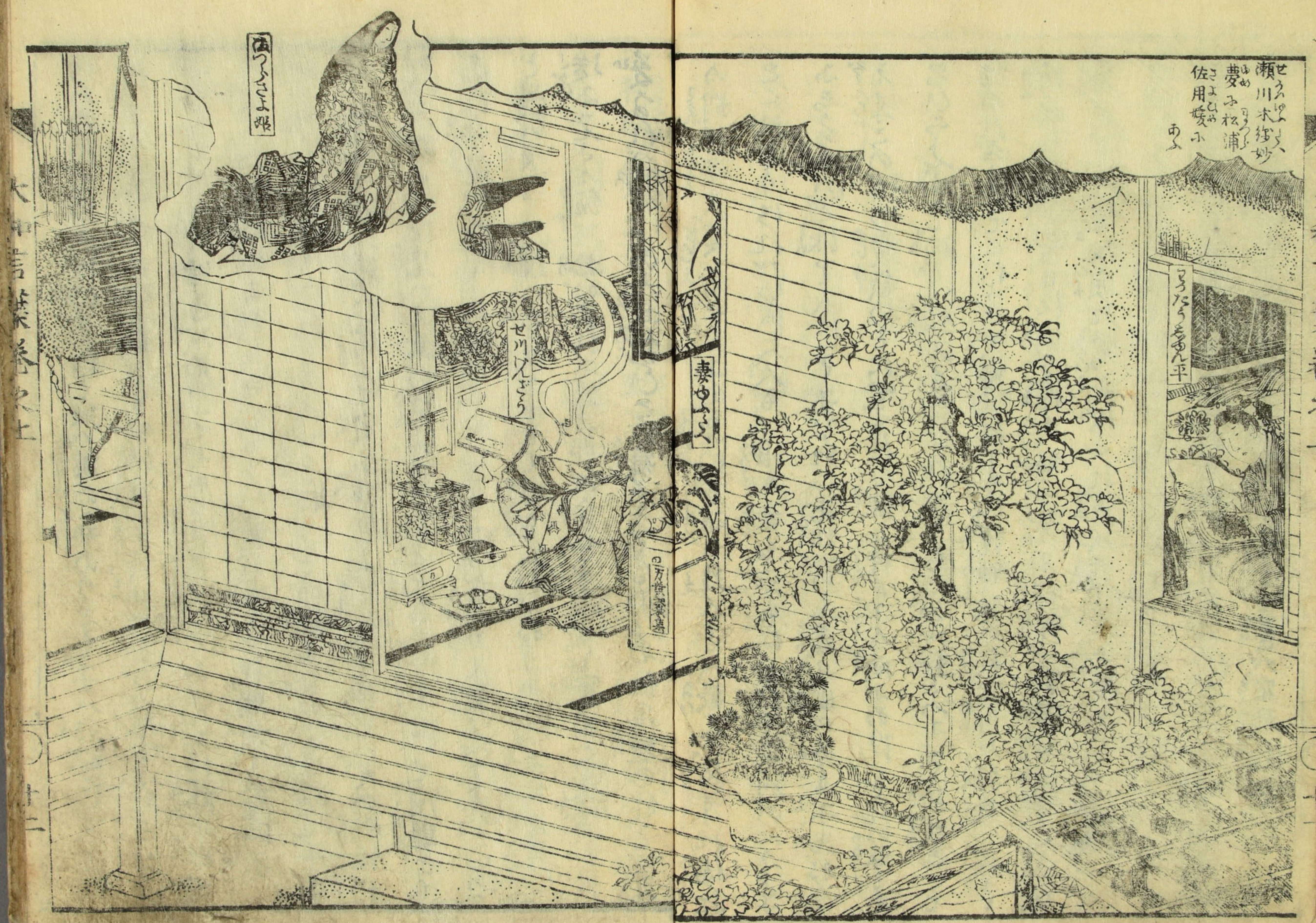


是より断絶せしむるに、歎かしたるに、なすべや。されば、ては、身が、乱るるに、人  
 の子、成養ひて、木、小竹を、接し、入中うて、公、由る、而、め、な、れ、し、世、の、神  
 仏の、初子と、い、ゆる、も、けり。當、地、淺、神、社、の、靈、驗、新、お、り、し、ん、か、れ、ば、か、ら、れ、ね  
 ば、も、夫、婦、か、成、裁、し、て、祈、り、を、ま、し、と、や、と、い、ふ、其、健、三、点、を、い、ひ、つ、お、鏡、明、神  
 と、佐、用、媛、が、所、持、の、鏡、神、体、と、す、れ、は、は、ま、め、夫、鏡、の、靈、明、は、し、て、對、し、て、照  
 ら、ん、と、い、ふ、と、は、し、めて、夫、婦、が、誠、心、を、奉、り、て、祈、り、し、し、納、受、志、を、ば、れ、る、に、  
 れ、か、つ、は、け、れ、お、松、浦、佐、用、媛、の、欽、明、天、皇、の、御、宇、高、麗、と、言、ふ、大、將、軍、が  
 兼、て、大、伴、連、挾、手、彦、が、妻、あり、挾、手、彦、高、麗、へ、い、く、と、い、ふ、佐、用、媛、は、  
 く、別、成、惜、と、當、國、三、根、郡、の、高、峯、お、登、り、領、中、成、脱、し、し、の、お、松、を、  
 悲、歎、哀、傷、し、し、お、忍、び、ど、傷、な、れ、人、不、覺、お、落、涙、し、遂、お、彼、山、を、名、づ、  
 て、領、中、成、の、嶺、と、い、ひ、り、と、い、ふ、お、も、お、り、て、お、お、入、り、佐、用、媛、が、夫、婦

忠孝は係に

の、別、成、悲、し、く、眞、節、の、至、り、て、吾、們、子、孫、の、終、ん、と、い、歎、く、  
 と、こ、は、な、り、は、れ、が、い、し、し、入、も、一、恨、も、金、も、お、も、何、せ、ん、お、よ、う、所、の、た、う、子  
 お、お、の、や、い、と、詠、り、人、と、し、子、り、は、先、祖、へ、の、孝、且、國、の、み、ま、不、忠、形、り、  
 え、身、の、身、の、愛、欲、の、と、に、せ、ざ、れ、を、監、し、神、り、人、間、お、り、し、と、の、悲、ま、  
 ら、ひ、く、と、ま、り、何、も、の、憐、み、お、い、は、ん、い、ご、ら、ば、お、お、む、つ、お、り、祈、願、志、を、  
 ほ、つ、れ、を、し、と、て、これ、より、夫、婦、の、終、も、に、鏡、神、社、の、鏡、神、體、を、肝、膽、と、推、し、  
 祈、り、れ、お、既、し、百、日、に、満、る、夜、夫、婦、が、夢、お、嬋、妍、と、れ、良、女、林、方、お、立、在、  
 初、の、ご、と、た、唇、お、開、け、鶯、お、似、と、れ、声、お、發、し、て、告、て、り、お、り、  
 け、の、ご、と、つ、お、子、孫、お、祈、り、し、こと、因、縁、あり、天、皇、の、至、誠、を、感、し、て、人、れ、子  
 ご、も、お、子、ま、り、お、こ、を、尼、お、家、を、嗣、し、身、お、母、お、養、せ、し、ま、り、も、嫡、室、未、だ、  
 と、生、得、氣、血、足、く、は、れ、お、子、お、産、ま、り、し、と、し、妾、を、養、バ、宿、願、願、お、か、ら、れ、し





西ついでに

セ川又さう

妻ゆゑに

瀬川木匠妙  
夢子松浦  
佐用俊小  
あふ

ころたろあん平

大木三日月巻六十一

大木三日月巻六十一

十一







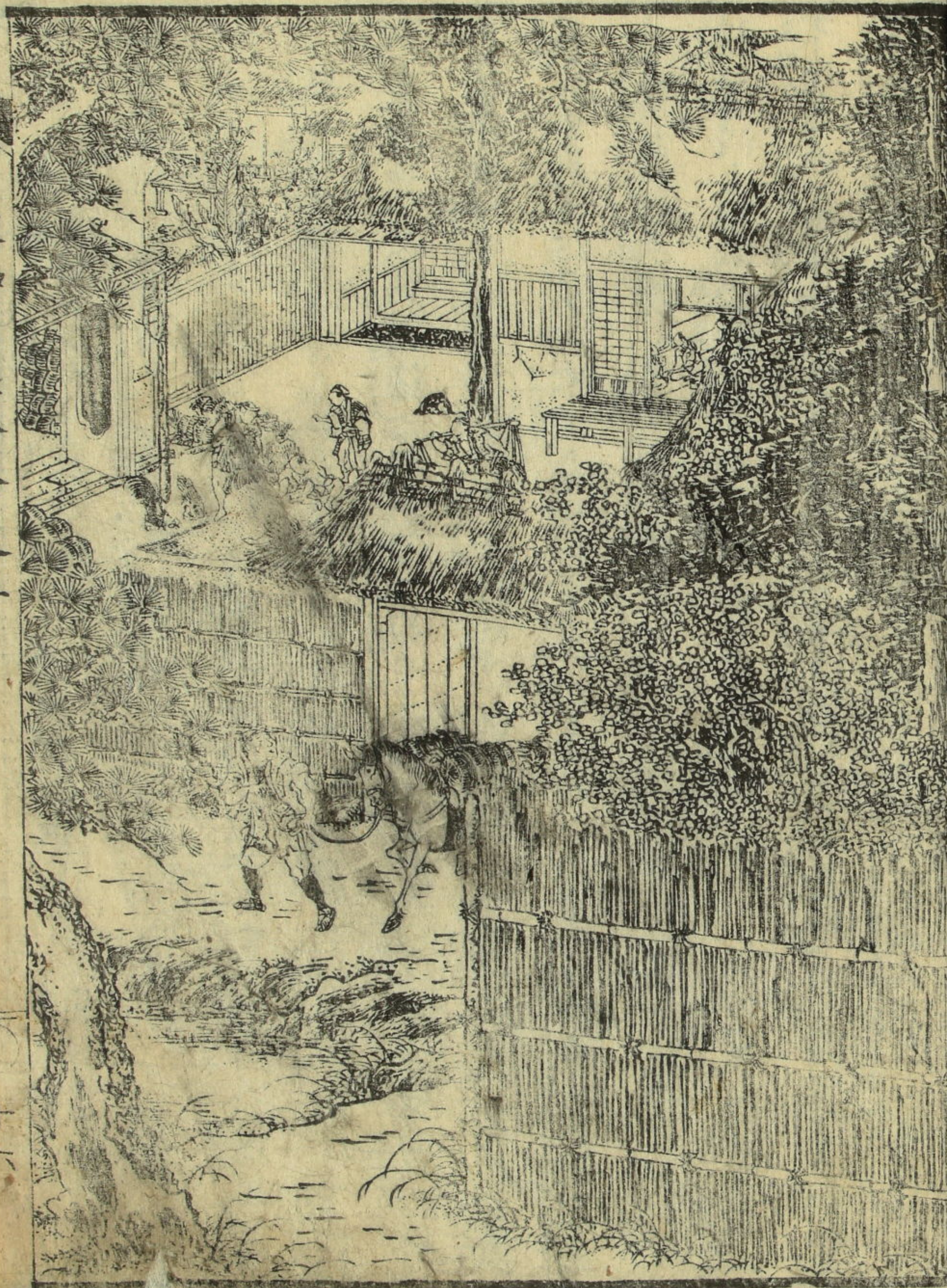
ありとていゆれお健之のゆかり感激しけふ多し怪れ一旦妻死養ひのこも  
子どに産ひなぐその家みぢをりし親族なれりのおはは他不遺嫁され  
ともいと易くおれどおれどおれど異毒死襲ふは何とやらんら病ふ  
快かき今のおぶくにはおえなりはいつれうへの黙止かに神の告め従  
ひまればと意かば木珍妙ふく飲びて次の日より夫婦昏されこと  
七日お及びさて健之の今茲十五ふりける若堂村沢俊平といふそのお  
縁由を説きおしてこれお家守らし夫婦うらほれたちて中毫山へ赴き  
ぬ時お文意元年二月四日おり彼俊平とゆふりのは幼れより孤あてのり  
けん健之夫婦ぬく憐みく召使お極お彼又庇栗の恩おありて信  
てはくおを健之これお手おの口太刀合おるゆふとも教りて  
て瀬川夫婦と松浦を旅なら日おれたらの漫行へてお公とのをいせり  
て之根郡領中毫山の麓お名その次の日おゆれより割籠まごお用意  
と。旅宿をくら出終日山のめぐりお彼此と徘徊されお日も中西お傾れて  
昏らかくおりおれと絶一人の女子も逢ごとも不審とてと説宣  
蒙りたおおとてお至くその北をえせ多つねはいうおるゆふを後ハ五臓の類  
より成とておはしなれとてたのせして却おおおなれ誘め暮ぬ向お昨夕  
駈けし旅宿お行くと今夜おのりし翌日松浦へゆくと。羊弱とりのお家  
おはしとてお公りとほしとてお木珍妙いしと本意なくて暮れお惜め何  
とおにゆくに足おさくみゆゆと夫婦後おなり先おおり舊の旅宿へお  
清おおの山道より柴を肩おこれ賤女羊ハ二十れうへお半おこのこ  
えと。海松のごくおれた。栲の蔽衣を被て髪お蓬お戴おる喘  
路お横お走ると。端なく健三夫婦おのり夫婦ハ是うん神は告



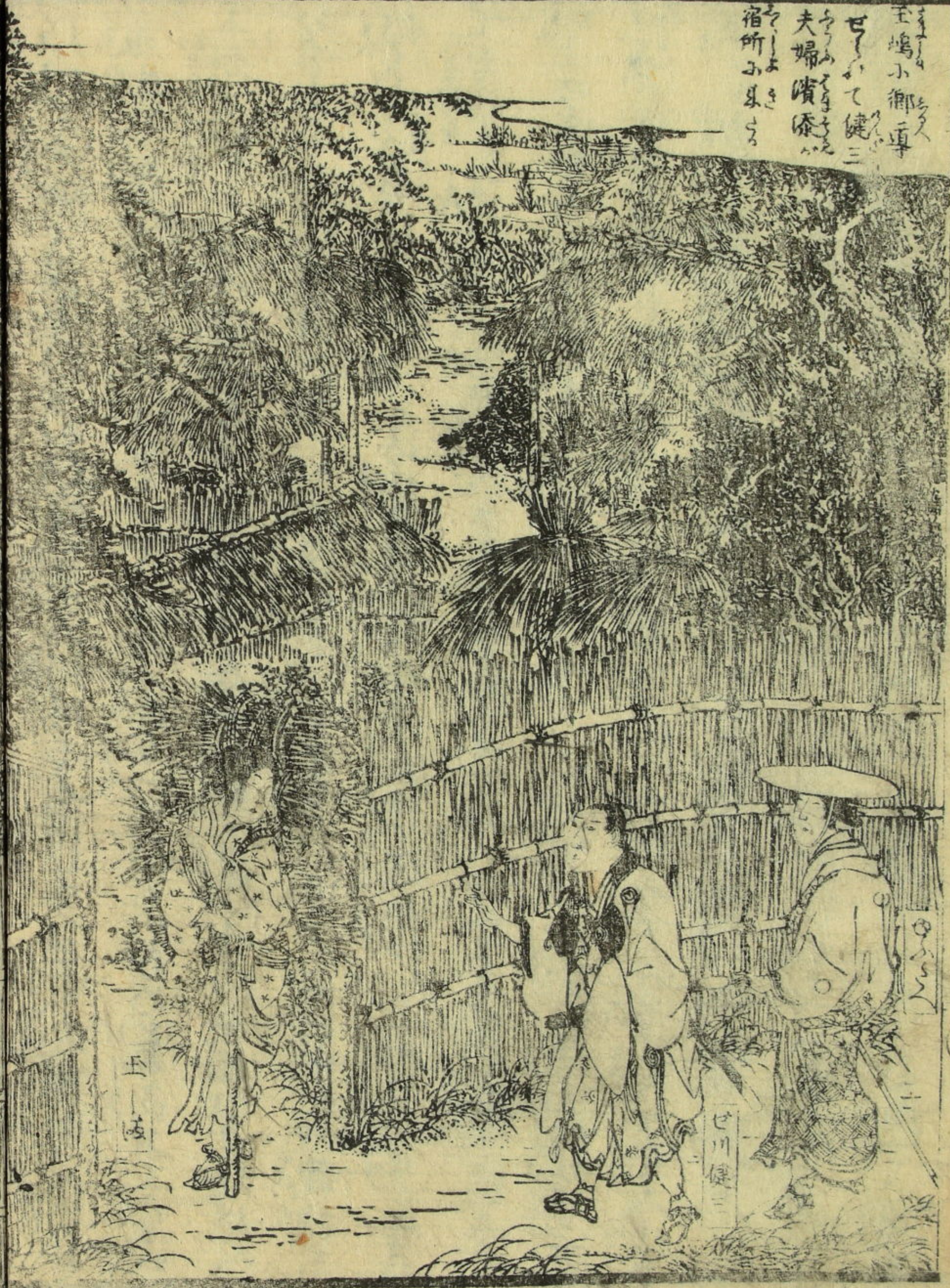
まひ。女子ありとぞふに。前の疑念もいまはらに畏おほえと。連忙く海  
ぞめ。ほろく。それハ形貌こそ窶しけし。顔色おのぼく。美麗めて村酒  
の人を碎し。野花却風情のたごじ。件の賤女ハえりのなほのこもて。此  
く立もぞほろく。それハ家路いそぎ。そのおろ。路も迷ひ多の。ゆく行  
か。か。え。多。教。ほ。い。と。せん。とい。か。み。健。三。答。い。い。な。吾。們。の。路。も。迷。ひ。多。る。者  
あはわふ。故。め。り。て。今。朝。より。あ。に。あ。る。終。日。そ。お。ろ。か。け。け。る。こ。の  
故。ハ。箇。様。く。の。る。な。り。と。て。ほ。ろ。各。氏。次。名。告。は。て。い。か。や。わ。が。夫。婦。年  
取。子。の。な。れ。を。歎。れ。と。鏡。神。社。へ。祈。願。を。か。た。と。お。お。い。わ。る。日。夫。婦。を。夢。お  
佐。用。媛。の。神。灵。託。宣。の。り。と。の。山。に。麓。不。到。て。薪。を。負。る。賤。の。女。不。遠。で。  
これ。が。身。が。贖。と。き。と。せ。よ。子。ハ。二。人。ほ。ろ。産。を。れ。と。告。め。い。と。れ。が。神  
慮。の。灼。然。る。果。ち。と。違。な。ど。か。く。神。の。孕。た。ま。な。れ。ば。明。白。お。は。せ。り。て。

ほれど夫のらはそれもかひは。家ハ何処ぞ。あじまると。夫婦言ハ存し  
首尾を告げり。いと信チなりければ。賤女ハ名もかひね。氣色も。怨地  
不向。不。越。し。神。の。導。た。ま。ふ。と。て。教。る。ふ。ね。身。が。懸。望。し。ま。ふ。中。也。ひ。又。は。は  
か。く。こ。を。た。れ。も。身。の。い。ま。ご。夫。も。お。り。て。父。母。兄。弟。は。こ。ろ。の。こ。し。死。親。族。も  
は。ら。い。い。わ。れ。年。よ。り。さ。の。麓。に。北。在。御。を。れ。濱。添。何。じ。が。家。の。下。女。と。あ。り  
て。玉。鳴。と。呼。れ。け。り。既。お。主。人。も。う。ら。ほ。ろ。世。身。な。れ。ば。か。お。ろ。ろ。あ。て。懸。り。じ。み。ぞ  
か。く。さ。の。か。く。も。合。し。ま。御。孕。の。こ。を。ば。じ。と。い。ひ。か。け。て。先。お。立。つ。行。形。跡。い。と  
か。ひ。く。あ。く。え。え。い。か。げ。瀬。川。夫。婦。の。面。を。め。り。て。送。お。十。二。分。の。笑。が。合。み。後。お  
跟。り。歩。行。極。お。御。門。な。れ。冠。木。門。の。家。お。到。つ。玉。鳴。を。健。三。夫。婦。と。い。ふ  
了。て。あ。い。結。多。の。じ。に。た。け。ん。と。て。懸。く。紫。が。担。お。り。此。け。お。奥。へ。入。り。健  
木。珍。妙。の。門。内。お。立。在。て。彼。此。と。い。ふ。に。里。あ。て。ハ。由。緒。の。れ。の。と。お。け。り。て。男。女





至嶋小御尊  
 世にて健三  
 夫婦蹟  
 宿所ふま





八九人と牛馬四五疋あり。旅の境母の柴小屋を建てふねて。薪秣を貯れ物と積  
ちてあり。かくて玉崎出でてきて。健三夫婦小對ひのじのええはかたせんした  
り。されず。誘ふとして。引く庭門より。書院めんとれ。処ふ到り。主人の濱添出迎  
て。送母姓名及名告り。ゆも中定りて。後健三の由縁と審小説をばして。玉崎  
が多かりしといふ。濱添これ及せて。彼へ元来本貫も定りたる。又親同胞も  
あつた。事及せしに。いりた。羊。人内経紀が。里へおて。あつた。形。おのれ。里の  
長及せおるに。され不正り。及せて。捨置く。た。小の。縁。件。人内経紀を捕  
く。縁故及穿鑿。女子は親里及同。送りゆ。そ。そ。と。ひ。け。に。彼と  
拐撃はとれ。小啞。翻ると。及や飲。たり。け。後。一。言。も。の。い。て。は。り。め。れ。作  
不便。それ。女子。及。家。お。と。めて。下。女。と。は。これ。を。玉。崎。と。名。け。り。と。り。は。れ。と  
縁故。分明。あり。と。は。れ。小。より。て。已。こと。及。む。と。五。駄。の。薪。及。人。内。経。紀。と。し。と。

放中りぬ。あつた。れ。小。玉。崎。中。の。毒。兼。解。く。物。と。い。ふ。と。い。ふ。が。その。事。が。及。所。ふ  
ぬ。此。に。い。は。る。ぬ。と。り。家。も。あ。つ。た。と。い。ふ。彼。の。誠。心。あ。り。の。ゆ。で。此。山。の。縁。と。人。い  
つ。と。て。あ。つ。た。と。い。ふ。れ。は。放。遣。ら。ん。と。使。な。く。い。ふ。と。も。鏡。の。神。社。の。託。宣。ふ。よ。う。て  
か。く。叮。嚀。ふ。け。え。も。い。ふ。を。推。辞。し。は。ん。い。も。か。し。彼。に。異。議。あり。は。往。小。人  
内。経。紀。ふ。と。し。した。れ。薪。の。價。及。多。る。と。進。せ。り。と。回。答。す。玉。崎。及。ん。と。て  
汝。の。客。人。小。伴。と。て。松。浦。へ。行。じ。や。と。同。小。玉。崎。答。す。人。の。婢。妾。と。お。ん。ん。の  
怒。り。か。た。に。は。れ。ぬ。と。往。小。家。公。に。庇。ふ。と。い。は。る。は。芳。た。に。推。せ。お。な。れ。る。か。り。に  
志。く。お。小。崎。と。い。ひ。の。身。及。賣。て。人。内。経。紀。と。し。し。し。し。薪。の。價。を。償。へ。え。よ。り  
の。志。小。け。り。と。い。は。る。於。是。談。合。一。決。と。て。健。三。木。崎。妙。が。飲。ひ。斜。り。は。主。人。か。い。ひ  
小。伴。と。と。玉。崎。が。買。價。及。違。り。か。り。の。外。小。當。け。の。謝。物。と。して。一。封。の。浪。子。及  
贈。り。は。濱。添。と。い。は。して。これ。を。て。玉。崎。が。衣服。及。整。この。夜。健。三。夫。婦。と。置



て尊く歎待けり。にて健三木珍妙の次の日早飯果て後濱添小別を告玉湯に  
はひて。松浦縣小立ゆるに玉湯のめじ夫婦に羊耳の鹿を討ひけえ。傍輩の  
男女あもひとり。に辞別。裳衣引草鞋穿あてり。湯もにさつらひか  
正し。ば玉湯の松浦小到より。健三夫婦小誠を以て。盡して仕る。ふぞ木珍妙  
をさむ。うりも妬し。思ひ氣多。好し。これ以て。骨内小異なり。はこれ。鏡  
神社の冥助ふり。けん玉嶋のその月より。有芽て。十二月上旬に安産す。健三  
も木珍妙も。彼が氣色孕て。えゆる。こ終より。起居ふつて。心以用ひ。まこと  
神意の違ふ。れをさむ。信心懈こと。好し。小産を。れ子ハ男あて。まも  
孫あり。か。好く。飲ひて。幼せ。父兄と。定め。松本郎と。名つけ。後小立ゆる  
弟と。し。浦一郎と。名ひ。日子孫て。鏡神宮。宮と。少り。は。子。ごも。あ。う。と。後  
と。祈。了。塵。と。と。え。と。養。育。母。の。乳。房。乏。し。か。ぼ。り。け。と。ば。二。人。の。子。ご。も

と。と。よく。に。肥。立。す。その。容。止。の。似。と。れ。り。一。顆。の。珠。を。重。た。れ。が。こ。じ。這。入。  
た。て。方。の。歩。行。め。と。さ。ふ。が。世。中。の。親。と。孫。に。れ。小。木。珍。妙。の。も。産。す。子。の。も  
ひ。を。は。して。さ。ふ。か。に。玉。湯。と。え。勅。と。は。玉。嶋。と。又。子。以。産。て。も。い。う。日。次。傳。して  
木。珍。妙。の。敬。冊。く。こと。と。め。に。務。と。り。今。茲。は。是。彼。小。羊。の。暮。る。と。を。と。も  
是。文。意。ハ。只。一。年。に。く。盡。く。弘。長。と。改。元。の。り。け。て。明。と。は。弘。長。元。年。の。春  
謙。倉。山。前。執。權。北。條。相。摸。守。時。頼。入。道。と。り。か。諸。國。の。名。護。人。お。が  
奸。曲。以。務。了。民。の。こ。孫。不。と。ん。と。て。世。の。病。氣。と。披。露。と。密。に。國。に。以  
行。脚。り。ま。ひ。け。れ。九。列。ほ。て。も。押。さ。り。て。瀬。川。健。三。夫。婦。が。徳。行。を。あり。な。す。ひ  
け。れ。あ。も。弘。長。二。年。の。秋。謙。倉。に。立。ゆ。り。て。吾。が。拳。惡。以。罰。多。く。叙。す。肥。前  
國。松。浦。縣。の。浪。人。瀬。川。健。三。道。孝。速。也。妻。子。を。俱。と。く。謙。倉。へ。と。ふ。た。は。は。は  
彼。國。の。守。護。小。仰。け。り。と。な。れ。と。め。て。瀬。川。健。三。ハ。名。ひ。も。か。け。も。俄。頃。の。ア。ラ。イ



ようそとれぬも取のへもいんまひ行装いんまひ敷いんまひに木珍妙いんまひのりもいんまひなり玉清いんまひ俊いんまひ平いんまひ  
 これいんまひにいんまひて用意いんまひ既小整いんまひひぬそのといんまひ健いんまひ三いんまひ妻いんまひと妻いんまひはいんまひびいんまひいいんまひ今いんまひ度いんまひ  
 謙倉いんまひへいんまひ言いんまひさいんまひれいんまひるいんまひそのいんまひかいんまひさいんまひれいんまひ吉いんまひのいんまひもいんまひあいんまひれいんまひ玉清いんまひ俊いんまひ平いんまひ  
 此の議脱いんまひさいんまひかいんまひじいんまひ且いんまひこの地いんまひあいんまひ父祖いんまひの墓いんまひもいんまひあいんまひれいんまひ玉清いんまひ俊いんまひ平いんまひ  
 志いんまひといんまひめいんまひんいんまひといんまひ多いんまひ入いんまひりいんまひるいんまひ所持いんまひの田園いんまひその半いんまひはいんまひ沽却いんまひしていんまひ踏費いんまひといんまひ半いんまひはいんまひ玉清いんまひ親いんまひ子いんまひ  
 か衣食いんまひの料いんまひ小いんまひさいんまひらいんまひはいんまひ色いんまひしいんまひ元いんまひ身いんまひ少許いんまひの田園いんまひないんまひれいんまひ今いんまひ又いんまひその半いんまひはいんまひ減いんまひぞいんまひれいんまひといんまひ記いんまひさいんまひ  
 屋いんまひといんまひ洞いんまひといんまひにいんまひ足いんまひらいんまひびいんまひといんまひりいんまひともいんまひ餓いんまひ死いんまひ凌いんまひぐいんまひにいんまひ便いんまひのりいんまひ且いんまひ既いんまひ小いんまひ万いんまひ里いんまひはいんまひ隔いんまひていんまひ入いんまひ再いんまひ會いんまひ徒いんまひ  
 ていんまひ搦いんまひるいんまひにいんまひ永いんまひくいんまひ別いんまひ死いんまひ決いんまひといんまひどいんまひといいんまひるいんまひ小いんまひ玉清いんまひ俊いんまひ平いんまひはいんまひといんまひ多いんまひくいんまひ意いんまひもいんまひせいんまひといんまひ涙いんまひにいんまひらいんまひといんまひていんまひ屋いんまひ  
 たりいんまひのいんまひれいんまひ小いんまひ木いんまひ珍いんまひ妙いんまひこれいんまひはいんまひ笑いんまひていんまひ夫いんまひ小いんまひ對いんまひひいんまひいいんまひりいんまひおいんまひれいんまひバいんまひカいんまひ公いんまひばいんまひよいんまひらいんまひるいんまひのいんまひれいんまひはいんまひ多いんまひくいんまひ平いんまひ人いんまひのいんまひういんまひふいんまひでもいんまひ妻いんまひ一いんまひ人いんまひ妻いんまひ一いんまひ人いんまひのいんまひれいんまひ今いんまひ玉清いんまひ俊いんまひ平いんまひはいんまひ俱いんまひしいんまひもいんまひふいんまひともいんまひ難いんまひういんまひちいんまひといんまひ好いんまひ  
 ひといんまひといんまひ多いんまひひいんまひはいんまひたいんまひらいんまひ加いんまひ之いんまひ二いんまひ人いんまひの子いんまひぞいんまひらいんまひ今いんまひ茲いんまひ中いんまひういんまひをいんまひくいんまひといんまひ才いんまひないんまひれいんまひハいんまひ何いんまひもいんまひといんまひ多いんまひひいんまひ

大木伊

348  
25  
31



